家族と海

菅島小学校　六年　小寺　敢

祖父と父は漁師だ。
でも、
父が病気になって、
祖父が一人で沖に行っている。
「八十も過ぎたじいが、
一人で沖に行ってかわいそん。」
祖母がいつも言う。

そう言えば、父が救急車で運ばれた時も、
「かわいそん、かわってやりたいわ。」
と泣いていた。
寝ていたぼくも気がついたら
大変なことになっていた。
父が入院し、母が看病。
祖父が沖へ行き、祖母がぼくたちの世話。

学校から帰ると、祖父が魚をさばいていた。
煮魚もさしみもプロ級だ。

祖父の背中は、かっこいい。
「大漁やったんか。」
「大漁やったらうれしいけどな、アハハハ。」

父と釣りに行ったことがある。
大きなワラサを釣った。
すごくうれしかった。
祖父の笑顔が、分かったような気がする。
「ありがとう。」
祖父には、いつまでも長生きしてほしい。
父には、もっと元気になってもらって、
前みたいに、たくさん魚を釣ってほしい。

ぼくは、漁師になるか分からない。
でも、ぼくの心には祖父の笑顔がある。
そして、父の漁師への復活を、願っている。
だから、ぼくたち家族は、
海とつながって生きているような気がする。
海よ、
いつまでも、ぼくたちを見ていてくれ。

第15回「海の香りのする詩」市内小学生の部で大賞に選ばれた小寺さんの作品です。家庭内の切実な実感です。祖母の言葉もよく利いています。つらい思いの中に、暖かい気持ちの交流がにじんでいる秀作です。（選考委員長　渡邉正也氏評）。背景のイラストも小寺さんに描いていただきました。（関連記事を11ページに掲載しています）